

# 第3回第5次市民自治推進会議

## 会 議 録

日 時：2024年2月1日（木）午後4時開会  
場 所：札幌市役所 12階 3・4号会議室

## 1. 開 会

○事務局（藤間推進係長） 少し早いのですが、第3回第5次市民自治推進会議を開催いたします。

事務局の藤間です。よろしくお願いいたします。

片山委員がご欠席、山崎委員が遅れていらっしゃいます。

会則に基づき定足数は満たしておりますので、このまま進めさせていただきます。

それでは、お手元の次第に沿って進めたいと思います。

議事に入りますので、ここからは鈴木座長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

## 2. 議 事

○鈴木座長 座長を仰せつかっております北星学園大学の鈴木です。

慣例に従いまして、私が進行を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

さて、2024年に入りまして本日が最初の会議になります。遅くはなりましたが、皆様、本年もよろしくお願いいたします。

それでは、議事に入らせていただきます。

お手元の次第に沿って進めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

前回、11月2日に開催されました第2回の会議では、市民参加の概念を歯車やオイルを使って表されていましたが、市民参加の概念と市民意向やニーズなどの現状の把握方法については、氷山を概念図にして、その把握方法について議論を行ってまいりました。

加えまして、事務局より、参考例といたしまして、スマートフォンを活用したニーズ把握手法の紹介をしてもらい、皆さんと意見交換を行わせていただいたところです。

本日は、これまでの議論を踏まえ、議事の1番目にある仕組みにおけるツールの位置づけについて議論を行ってまいりたいと思います。

前回の会議から3か月ほど経過しておりますので、その辺をご確認いただき、議論していただきたいなと思っております。

それでは、事務局よりご説明をお願いいたします。

○事務局（寺川町内会支援担当係長） 資料の1枚目に基づいてご説明させていただきます。

まず、上段のタイトルのすぐ下の部分をご覧ください。

前回までの議論を踏まえ、仕組みにおけるツールの位置づけを確認するという意味合いでポイントを2点にまとめております。

1点目は、ツールは意見・意向表明のためのハードルを下げるなどの意味においては有効な手段のひとつである、2点目は、目的によっては、事前に必要な情報提供・情報共有

を行った上でツールを利用する必要があるということです。

左側の（１）に各委員から頂戴した主なご意見を列挙しております。先ほどのまとめと重複する部分がございますけれども、順に読み上げさせていただきます。

「意見・意向表明のためのハードルを下げる」「スピーディーに大まかな傾向をつかむ」という意味では、意向把握の有効な手段のひとつであるということ、一方で、政策全体の理解を過度に単純化してしまうと恣意的、作為的にもなりかねないので、利用には留意が必要であるということ、最終的な物事を判断することを目的とした意向把握のためには、事前に施策等に関する必要な情報提供・情報共有を行った上でツールを利用すべきということ、市民のあらゆる層から多くの意見・意向を表明してもらうには、目的に応じて手法を吟味しなければならないのではないかとということです。

それから、次の２点は、どちらかという、手法的な要素ですけれども、意見表明が「したくなる」工夫が必要ではないか、表明しやすくなるというよりもしたくなる工夫が大事になってくるのではないかと、最後は、サイレントマジョリティ層を分類し、それぞれ有効なアプローチ方法を考えることも必要ではないかとということです。

最後の点については、資料の下にイメージ図を氷山で示しておりますが、サイレントマジョリティ層とひとくくりに申し上げましても、例えば、図の右側の①や②のように層が分かれており、①は、意見はあるけれども、表明をしない層、②は、何らかの理由で全く無関心な層としておりますが、こういうことも考えられるのではないかとということです。

そして、①の方々には何かしらの工夫をすることによって意見を出してもらえないか、あるいは、②についてはもしかしたら工夫の余地がないのではないかと、これを表しております。つまり、それぞれに対するアプローチ方法、手だては別に考える必要があるのではないかとご指摘だと認識しております。

そして、これらを踏まえて、見えてくるツールのイメージを（２）に図示しました。

（２）ツールの位置付けの文字の下の部分についてです。

繰り返しになりますが、ツールは、意見・意向の把握等のための有効な手段の一つであり、目的に合わせてさまざまな手法を組み合わせる必要があります。このことが現状のツールの位置づけです。

図の上側には、左から、個人、地域・団体、不特定多数のように意見や意向を把握したい対象を図示しております。この対象に関しては、さらに細かく分類すれば、年齢や居住地域、性別など、様々な属性があるものと認識しております。

そして、図の下側には、その意向把握などの手段の例として、左側から、アンケート、説明会・意見交換、オンラインの利用、ツール、その他と図示しております。これらの手法を対象と目的に応じて組み合わせることによって、市の実施する施策、計画、事業などに関し、サイレントマジョリティも含む様々な層の意見や意向を把握することを目指すことが目標であり、ツールもその手段の１つとして位置づけを確認しておく必要があると考えております。

このような認識に立った上で、今後さらにツールに関する議論を深めていくに当たり、右下の緑がかった囲みに今後活用が可能な市のツールの情報についてご紹介をさせていただいております。

現状、意向把握などに有効であろうと考えられるツールは2点あります。

1点目は、左側のさっぽろ圏スマートアプリです。

このアプリは、現状の登録者数が約6,000人で、おしらせ配信やアンケート配信ができます。さらに、まちなかを歩いたり動画を視聴したりしてもらえるカギがあり、それを使用してポイントが当たる抽選に参加できる機能も備わっております。

そして、そのポイントは、WAONのポイントに変換ができます。

また、このほかの機能として、例えば、ごみ出しのカレンダーを確認でき、ヘルスケアとして日々の体重・血圧記録などにも使用していただけるなど、幅広い機能を有しております。

2点目は、札幌市公式LINEです。

登録者数が約18万人おりまして、通常は市のイベントなどのお知らせ情報のほか、災害時などに緊急の情報を配信しております。また、LINE上でのアンケート機能も有しているほか、アンケートフォームのページへ誘導し、その先で回答してもらうことも可能です。

既存のツールの活用という観点からは、今後、こうしたものを利用することも可能ですので、議論の参考としてご紹介をさせていただきます。

なお、今回の会議におきましては、本市のデジタル戦略推進局からもツールに関わるご説明をさせていただきたいと考えております。

事務局からは以上です。ご議論のほど、よろしくお願いいたします。

○鈴木座長 ただいまの資料の説明に関し、皆様方より補足のご質問やご意見がございましたらよろしくお願いいたします。

○オブザーバー（斎藤広報部長） 資料の右下に札幌市公式LINEがありますが、これに関して補足をさせていただきます。

実は、今日も札幌の公式LINEの中で事業効果に関する市民意識調査のご案内が流れました。それをクリックするとウェブ上の意識調査のページに飛びまして、そういう仕組みはもう持っている状況です。

そこで、これをどう使っていくかということもあるのですが、現状の課題といたしまししょうか、今は飛ぶだけでして、そこから回答してもらうとき、重複の回答をどう防ぐのか、あるいは、属性の偏りをどうするのか、さらには、LINEというのはそもそも登録されている方の属性に偏りがありますので、それをどう考えた上で使っていくのかということがあります。

また、資料の左下にあります氷山の図の②の人たちというのはそもそもLINEの登録をしませんので、そういう方たちにはどうリーチしていくのか、あるいは、どうやって登

録してもらおうのかが課題かなと思っています。

そして、この議論のための見直しではないのですが、今、LINEのバージョンアップを考えておられて、その1つが多言語化です。今は日本語対応が基本になっていますけれども、災害時など、情報を外国人の方にもお伝えするため、多言語化に取り組んでいこうと考えております。

また、今、様々な情報が流れていて、例えば、災害があったときは警報が出ています、あるいは、熊が出たよという情報が流れますけれども、それ以外に普段から使いやすい、これがあったら登録したくなるなどというような内容にしていく必要があるかなと思っています。例えば、自分の住んでいる地域を登録し、ページを開いたらごみカレンダーがすぐに見られるような機能を盛り込んだらどうかというようなことを考えています。

また、アンケートの機能も入れることはできますが、重複回答をどうするのか、属性の把握をどうするのかなど、これからの検討課題があります。技術的にできるものもあるのですが、それをどう活用していくかはこれからの検討課題だということです。

○鈴木座長 そのほか、補足説明、あるいは、ご意見やご質問等がございましたらよろしくお願いいたします。

○梶井委員 仕組みにおけるツールの位置付けについてですが、ここが一番重要だと思います。この会議の中で、こういう位置付けでこのツールについて提案したいということですから、その次の黒四角の2つは市民の皆さんにも納得してもらわなくてはいけないところだと理解しております。

例えば、2行目の目的によっては事前に必要な情報提供・情報共有を行った上でツールを利用する必要があるというところです。この「目的によっては」というのが非常に曖昧ですよ。もちろん、目的によるのかもしれませんが、基本的には、どんな目的であっても事前の必要な情報提供・情報共有がなければ意見を募ることはできないと思っているのです。ですから、「目的によっては」という文言は要らなくて、「ツールを利用してもらうためには必要な情報提供、情報共有が必要である」という言い回しになるのではないかなということです。文言のことで恐縮ですが、ここは重要な2行だと思いますので、申し上げました。

その上で、1行目です。これは私が少しセンシティブなのかなとも思いますが、「意見・意向表明のためのハードルを下げるなどの意味において」という文言です。これもすごく曖昧で、ハードルとは何だろうと思いました。要するに、参加しやすいようにということだと思うのですが、ハードルを下げるというと、そこに何か重たい意味を含んでしまうような感じがしました。

立場の違いを超えて幅広く意見を汲み取るためには有効な手段の1つであるというような言い回しとする、さらには、「など」という文言がなくてもいいのかな、こうした言い回しでなくてもいいのかなと思います。

○鈴木座長 まさしくこの2つの四角に関しては、大きな仕組みにおけるツールの位置づ

けについての柱になる場所ですので、誤解を受けない意味でも、また、この会議の方針や趣旨を確認する意味から言葉を考えたほうがいいのかもしれないなと思いました。

ただいまの意見も含め、ほかの委員からも何かご意見があればよろしく願います。

○事務局（川村市民自治推進課長） 今の話ですけれども、我々の思いというのは梶井委員のおっしゃるとおりですので、ここは表現を変えさせていただきます。

○鈴木座長 先ほどの「目的によっては」というのは、手法といいますか、やり方なのでしょうか。

○事務局（川村市民自治推進課長） 梶井委員が今おっしゃったように、我々としては、何であろうが、事前の情報提供や情報共有は絶対的に必要だと思っているので、「目的によっては」という文言は取ることにしたいと思います。

○鈴木座長 「必要な」ともありますので、まさしくそうかなと思います。

そして、ハードルのところです。これは言葉のイメージもあるかもしれませんが、何らかのハードルといいますと、障害物みたいなものを想像するところがあります。しかし、趣旨としては、そういうことではなく、幅広くということや多様な方にとという意味ですよね。

○事務局（川村市民自治推進課長） そうです。

○鈴木座長 そのほか、(1)にツールに関する各委員からのご意見をまとめていますが、他に補足や確認、あるいは、こういうことも重要ではないかということがございましたらご意見やご質問なりをよろしく願います。

○野田委員 今、意見を整理していたのですけれども、まず、先ほどの梶井委員の話はそのとおりだと思います。多分、ハードルというのはコストの意味で使っていたと思います。参加しようというとき、例えば、委員会に行くためには日程を空けてそこに行くことになりますよね。つまり、参加にはコストがかかるけれども、そのコストを安くするという意味でハードルを下げるとしていて、結果として、それが幅広い意見を聞けたり、参加しやすい環境をつくれりすることになるのでしょうけれども、たしかコストの意味だったのかなということです。

そして、私からは、このうちのサイレントマジョリティ層の分類に関わることです。これは次の議題にも関わってくることですけれども、個別具体的なテーマを設定して、みんな話したくなるようなテーマであれば、サイレントマジョリティ層はあまり気にしないでいいということですよ。

サイレントマジョリティ層が問題になるというのは、市政全般、あるいは、全般ではないものの、市民がすぐには理解しにくいもので、大きな予算を使って駅前の再開発を行う、大きいイベントを行うというときで、そうした場合には意見を言う人と言わない人が出てくると思っています。例えば、次の議題にある成人式などの話になると、参加すべき対象者が特定されますので、そうした特定することができるようなテーマにおいてはサイレントマジョリティがいても働きかけやすいかなという気がしました。ですから、これはテー

マによるということです。

もう1点、これも梶井委員の最初の「目的によって」の話に関わってくるのですけれども、あらゆる行政が行っていることについては市民からの信託の下で行っているので、市民は情報を得る権利もありますし、市民の代わりに行政がやっているということにはなるのですね。そして、政策決定過程において、プレサースペイみたいにさらっと意見を聞いてみるというときは、情報を提供した上でとなるのでしょうけれども、そんなに細かな情報を提供するというより、取りあえず意向を聞いてみて、どんな感じになるのかということになると思うのです。つまり、政策のどの段階で聞くのかということで、多分、目的によって違うとイメージしたのではないかなと思いましたが、皆さんと共有している考え方や価値観、参加の在り方というのは恐らく同じ意識なのではないかなということです。

○鈴木座長 野田委員、補足していただきまして、誠にありがとうございました。

そのほかに何かございませんか。

○梶井委員 ここに出ていない部分になるかもしれませんが、例えば、左側に「意見表明が『したくなる』工夫」と書かれています。もちろん、いろいろな情報提供のほか、ハードルという言葉を使えば「ハードルを下げる」ことで意見表明がしたくなるということが工夫に入ると思うのですけれども、そこに局所化せず、もう少し俯瞰的に、意見表明がしたくなるようなシチズンシップ教育、市民教育をやっていくことが市民自治推進の核心だと思うのです。

これを文言としてどう入れるかは別ですが、それは念頭に置いて、そういうものも踏まえた上でのツールの開発なのだとということで、両論を併記したほうが大きなものになっていくのではないかなという気がしております。

本当に最初の頃に野田委員がおっしゃったことで、個人の利益を超えて全体の利益を考えられるような市民をどう育てていくか、そういう意見を汲み取ることが重要なのだというのがすごく印象的だったので、意見を言える市民をどう育てていくか、そういう視点を持ちつつ、そのためのツールの開発だということも重要かなと考えております。

○鈴木座長 最近、まちづくりではなく、まち育てやまち育ちという言葉がありますけれども、まちというのはつくるものではなく、育てていくものだとことです。また、今、教育というキーワードもいただきましたけれども、そういった視点も入れていただければと思います。

なお、私がイメージするのは醸成です。もっといい言葉があるかもしれませんが、社会を醸成していくといいますか、育てていくという趣旨が反映できるといいのかなと思いました。

そのほかにかがでしょうか。

大村委員に伺おうと思うのですが、ツールの利用については若い方が思い浮かぶのですね。私も大学におりまして、ゼミ生との連絡は、最近、LINEは見るのだけれども、メールは見ないという傾向があるように思うのですね。ツールで入りやすくなると思います

か、参加しやすくなるという観点からの感想等があればお聞かせください。

○大村委員 今、市政以外でも、大学のことも含め、いろいろなツールを使い分けている状況で、今後、どんどんとツールが増えていくと、使う人にとっては使い分けるものが1つ増えてしまうということがあると思っております、どう受けてもらうかといいますか、どうやって自分の生活の一部としてツールを取り入れてもらえるかが大事なのかなと感じました。

L I N Eというのは皆さんも自分の生活に取り入れているツールなので、公式L I N Eは既になじみのあるものだと思いますけれども、市民の方の生活のこういったポジションに、今話しているツールが来るのかだと思います。

○鈴木座長 今、大村委員に言っていただきましたが、生活の中で普段使えないと使うまでの距離が遠くなるということもあるのかもしれないなと思います。

一方で、今日か昨日か、ネットのニュースで目にしたのですけれども、いわゆるZ世代では、最近、スマホ使い疲れが見られるというような記事がありました。

私もそうでした、学生と接している関係からSNSは使っているほうだと思っています。でも、最近、情報があふれてしまっていて、返事が遅くなったり、すぐに見なくてもいいやと思ってしまうところがあります。これは、おじさんだからそう感じるのかもしれない。

L I N Eは結構有名ですけれども、最近はSNSでもいろいろなものが出ていますし、同じL I N Eにしてもグループに属さなければいけないということもありますので、広げていく、また、使っていただくという意味ではそうしたことも考えていかなければいけないのではないかなと思います。

そのほかにございませんか。

○大村委員 補足です。

(2)のツールの位置付けのところでは、これはこちら側から見たツールの位置付けかと思っておりますけれども、市民から見たツールの位置づけの概念図もあるといいかなと思しました。

○鈴木座長 ご提案をありがとうございます。

まさしく、今回は市民目線、住民目線に立った議論をかなりしていますので、その位置づけも整理しておくといいいのかもしれない。

そのほかになにかございませんか。

○山崎委員 的確な整理をしていただいた図だと理解しております。

今後の可能な市のツールとして、スマートアプリやL I N Eなど、言ってみればSNS系が2つ例示されています。これからこういった進め方をするかというとき、一方においてはデジタル系のものが出されますけれども、他方、今、委員長が言われたこととも重なりますが、アナログ系といいますか、フェイス・トゥー・フェイスでできるものも必要かなと思います。ここではツールということで出されていますが、従来型の手書きアンケート

トのほか、説明会や意見交換会などをどう使い分けていくか、どう組み合わせっていくかも重要ではないかということです。

ツールの開発や工夫というのは、今、いろいろなところで実践されていまして、先進事例を探したら幾らでもありますけれども、そうしたものと同時に、従来型のアナログ的なツールの工夫の余地についても位置づけておく必要があるではないかと思います。

○鈴木座長 すっきりとまとまるようなキーワードを言っていただき、ありがとうございます。

今回は、たまたま1つの方法としてツールを使って何かできないかというまとめになっていますけれども、今後の話にもつながるものとして、山崎委員に言っていただいたように、アナログとデジタルの使い分けと組合せを意識しながらツールの位置付けといいますか、ポジションを考えていくことが重要かなと思います。

ほかにございませんか。

○梶井委員 先ほど大村委員がおっしゃったように、ツールやアプリを新しいと思っているのは私たちのような世代だけなのかもしれません。先ほど大村委員の意見を聞いて、これ自体が遅れているかもしれないなと思いました。

たくさんツールがあり過ぎて、若い世代は辟易しているわけです。だから、ひょっとしたら速達か何かでアンケート用紙が送られてきたほうが「おっ」と思うのかもしれない。ただ、速達というのはお金がかかるので、これは現実的ではないと思いますが。

でも、今、山崎委員がおっしゃった組合せが大事です。アナログというのであれば、例えば、海外の空港なんかによくあるのですが、市役所の出口のところに、市役所の対応はどうでしたかという設問とともに、笑っている人形と怒っている人形を置いておき、透明のボックスに入れてもらうというものです。これが透明だと、どちらにどれぐらい入っているのかが通りかかる人にも見えますし、市役所の職員の人も、怒っている人形のほうのボックスにいっぱいたまっていたらちょっとまずいなと思えるわけです。こういうアナログ的なものでも市民意識が可視化できるし、醸成できるので、そういう工夫もあっていいのかなと思いました。

○鈴木座長 海外の入国審査ときにありましたけれども、それもいいかもしれませんね。市の職員の方にも一般の方にも見える化をするのは、1つの手だてですね。体重なんかも測っているだけで効果が出るというような話もありますので、うまく組み合わせながら考えていければいいなと思います。

議事(2)は、先ほども少しご意見がございましたけれども、今後、実験的に何かできないかということです。仕組みや位置付けにも関わってきますので、次に進めさせていただいて、(1)と(2)を併せて議論させていただければと思います。

それでは、議事(2)の市政に関する具体的なテーマを用いた手法の検討についてです。

まずは事務局より資料の説明をお願いいたします。

○事務局(寺川町内会支援担当係長) 資料の2枚目をご覧ください。

前回の会議におきましても、この会議体の期間中に行う実験の手法などについてやや議論が及びましたが、市政に関する具体的なテーマを用いて手法を検討したいと考えております。

上段のタイトルのすぐ下の四角の部分に実験の目的を記載しております。

意向把握から市民参加（議論）を経て着地点を見出すことを実際に行い、その過程から今後の「仕組みづくり」の議論のヒントを得ることを目的としたいと考えております。

次に、（１）の実験の概要と題材についてです。

まず、実験の概要についてです。

全体のスケジュールの案として、左側の第３回、第４回の会議において内容の検討を行いたいと思っています。本日は、主に実験の手順案や課題の共有をさせていただき、手順の工夫に関するアイデアなどを出していただければと考えております。そして、次回の会議では、今回の議論を踏まえ、内容を決定したいと考えております。

次に、右側の実験期間です。

期間は約３か月と記載しておりますが、内容によってはもう少し長くかかるかもしれないと考えておまして、これはあくまで最短の期間とご理解をいただければと思います。

実験は市が主体で実施しますが、内容によっては委員の皆様からもご協力をいただきたいと考えております。例えば、前回、大変ありがたいことに学生の方のご参加といったお話もございましたが、そうしたご提案などを頂戴できますと幸いです。

そして、右側の第６回会議以降ですが、実験期間を経て、結果の分析を行います。その中で課題の抽出や仕組みづくりに生かすポイントを検討したいと考えております。

次に、題材の概要についてです。

左下のところをご覧ください。

今回、市でご用意しましたのは、成人の日行事、いわゆる成人式に関するものです。

緑がかった四角い枠をご覧ください。

毎年、成人の日の行事については「成人の日」の前後に開催しております。対象は２０歳を迎える方で、直近の令和６年１月では対象者は１７，９０９人です。その参加率は、全市平均で６１．２％でして、最高は、区別では清田区で８１．４％となっており、８割を超える方にご参加をいただいています。

次に、主催ですが、各区の成人式実施委員会が行っておりまして、地域の方々に構成されております。市の関わりですが、各区に対して１００万円の事業費を配分しております。

そして、成人式の催事の内容についてですが、区によって異なり、実施委員会で企画、運営をされています。

最後に、会場についてですが、こちらも実施委員会で確保していただいています。

続いて、右側の（２）の実験手法の検討についてです。

ここでは、題材である成人の日の行事の課題や実験の手順案についてご説明を申し上げます。

まず、上段の表に成人の日の行事のイメージや課題などをまとめております。これはあくまで行政目線で整理をしたもので、実際にそれぞれの主体がどのように感じてもらえるかを反映したものではないので、ご了承ください。

上から、参加者である新成人の方、次に主催者である地域の方、そして我々行政です。

まず、1番上の新成人についてですが、基本スタンスとしては記念のイベントに地元の友人たちと参加して一緒に楽しみたいといったスタンスなのではないかと考えております。そして、現状のイメージや課題ですが、式典そのものよりも、どちらかというところではクラシックのような雰囲気を楽しんでいただければいいのではないかと感じております。

次に、地域についてですけれども、基本スタンスとしては地元の若者の成人を地域で祝いたいということをお感じになられているのではないかと考えております。そして、現状のイメージや課題ですが、高齢化、あるいは、担い手や運営面で人が不足しているのではないかと、それから、企画、運営に関わることにしても負担が大きくなっているのではないかと印象を受けております。

最後に、行政についてですが、基本スタンスとしては新成人の方や主催の地域の方々の思いを尊重しながら開催を支援したいと考えております。一方、現状では、開催を支援したいと感じているものの、地域の負担が大きいという面もありますので、運營業務を一部担う必要があるのではないかと考えております。それから、地域で会場を押し寄せていただいておりますけれども、そういった費用、さらには、運営の面での費用がもっと必要だというお声もあり、費用負担が増大していくのではないかと考えております。

次に、下の手順案のところをご覧ください。

これはあくまで事務局としてのたたき台で、工夫の余地は多分にありますので、この後、アイデアなどを頂戴できればと考えております。

大まかに流れを3つ記載しております。

1番はアンケート調査で、成人式に対して感じていることや課題だと思っていられることについての調査を想定しております。

対象については、成人式に関わったことがある方、あるいは、これから関わる方としており、無作為で抽出した19歳の方、成人式を終えた方も含めた大学生、そして、地元の実施委員会の方々を対象に調査をすることを想定しております。

次に、2番は調査を基に議論ということで、最終的には議論を行った上で着地点を見つけることを目標にしております。具体的には、1番で行ったアンケート調査の内容を分析した結果を基に、若者、実施委員会の方、そして、行政が議論を行い、一定の結論を出すというようなイメージです。このとき、行政からは議論に必要な情報を客観的に提供することも必要であろうと考えております。

最後に、3番は結果の分析で、調査、議論、着地点の見出しという流れから、今後の仕組みづくりに生かすためのポイントやヒントを得たいと考えております。

繰り返しになりますが、あくまでこの手順はたたき台として、この後、工夫すべ

き点など、たくさんのアイデアを頂戴できればと考えております。

説明は以上です。ご議論のほど、よろしくお願ひいたします。

○鈴木座長 今回、事務局から題材として成人式という案を出していただきました。また、それに関する実験手法の検討ということで、手順などをたたき台として出していただきました。議論のベースになるような、非常に分かりやすくまとめていただきまして感謝を申し上げます。

それでは、皆様方からご意見やご質問を頂戴いたしたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。

○山崎委員 これを実際にやるということで、大変興味深いです。また、ご提案を聞いて、何かご協力できないかなと思ひながら聞いていました。

これは全く私の勝手な意見ですけれども、4月から新学期が始まって、大講義室で地方自治論という授業をやるのですよね。そこで学生にやらせてということを考えています。第3回が今回で、4回目ということは、スケジュール感としては4月から7月の間には何かできそうかなということですよ。

もう1つ、成人の日の行事についてはたまたま例示として出されたのか、これで走ろうと思っているのかです。もうちょっとわくわくするようなテーマがないかなと思ひました。私は、いろいろな事情があつて成人式に行つておらず、何の思ひ入れもないのです。むしろ、成人式なんか別になくてもいいやと個人的に思ひています。

それは脇に置いておくとして、成人式でもいいのですけれども、2年生が対象で、3年生にも聞いているからいいのですけれども、もうちょっとわくわくするような魅力的なテーマがあつたらありがたいなという大変無責任なリクエストでした。

○事務局（川村市民自治推進課長） 何で成人式かですけれども、資料の（2）の行政目録でのイメージと課題に書いてあるとおり、実際に地域から声もいただひいて、検討しなければならぬ時期に来ているということがあります。

また、成人の日の行事は我々市民自治推進室が所管している事業として、他部局に断ることなく、実験の題材になるのです。もっと面白い話題や論ずべきことはあるかもしれないのですけれども、その調整が難しいという我々の事情もあり、これを選ばせていただきました。

○事務局（神市民自治推進室長） 最後に結果の分析とありますけれども、出てきた結果については、今回、政策につなげていこうと思ひています。出てきた結果を基に、札幌市として、議会も含めて、では、どうするのかを決めて、今、各区でやっているものを1か所に集める、あるいは、実施委員会に若者が入るなど、政策へのつなぎも見据えています。

ほかにもしあれば次にやりたいと思ひますし、これだけで終わろうとも思ひていません。

○山崎委員 確かに、もうちょっと注目を引くような面白いテーマが仮にあつたとしても、結局は机上のシミュレーションで終わってしまうかもしれないということですね。そうではなく、事業として改善なりフィードバックなりさせるということで、非常によく分かり

ました。

余談ですが、学生に選挙になぜ行かないのかという話をしたことがあるのですね。そうすると、少ないながら、一部の学生から、もともと住んでいた本州の市町村の成人式に出たいから住民票を移さない、それで住民票がなくて、不在者投票をするのも面倒くさいから選挙に行きませんでした、投票しませんでしたという学生がいたのです。

このように、私とは逆で学生にとっては大事なイベントなのかもしれません。その濃淡も含め、やってみると確かに興味深いテーマなのかもしれないですね。

地域への思い入れみたいなものがある、札幌にいるのだから札幌でいいではないかではなく、もともと住んでいる本州の市町村で参加したいという地域意識みたいなものもひょっとしたら出てくるかもしれないので、分析の仕方によっては非常に面白い、それこそ市民自治を語る上で面白いテーマかもしれないですね。

○鈴木座長 まさしく、北大は、今、地元が道外の方が6割を超えているのです。

○山崎委員 全学では7割で、法学部だと6割ぐらいです。

○鈴木座長 道外の学生も結構おりますし、今のお話ではないですけども、住民票を移さないで地域に戻って成人式に参加する学生もおりますので、ある意味、面白い実験になるのかなと思っております。

私が最初に感じましたのは、19歳や20歳の成人式に参加する年代の方というのは、意識がないということで無関心というわけではないかと思うのですけれども、今回の議論のサイレントマジョリティといいますか、なかなか声が市に届いていない層にもなると思います。

また、最初の無作為のアンケートというのも、これまでの手法の踏襲でもあるわけです。そのため、回収率がどうなるかも気になります。また、山崎委員におっしゃっていただきましたが、大学の教員も何人かおりますので、授業で頼むということはあるかもしれませんが、最近では授業で頼んでも一般のアンケートと同じような傾向になるのかもしれませんが、授業でも扱ってもらったので、先生にも頼まれたので、ちょっとやってみようかなということで少し回答率が高くなるような気もしています。そうしたこともモニタリングし、新しい手法について考えていくと面白いのかなと思いました。

私は、成人式は浪人時代でしたけれども、豊平区に実家があり、行きました。昔は月寒体育館のスケート場に絨毯を敷いてやっていました。また、その後は無料で自由に滑っていいよとしていました。

地域によっては、テーマパークでやっているところもあります。清田区は、体育館でやっているのです。そして、成人式の後に商業施設に寄って行ってくださいとしていて、イベントを絡めて工夫しているところもあります。このように、地域のまちづくりではないですけども、地域の活性化と結びつけて分析ができれば面白いかなと思います。

話し過ぎてしまいましたけれども、ほかに何かご意見がございましたらよろしくお願いたします。

○野田委員 私が何となく想像したことがどれぐらい合っているかを確認したいなと思います。

成人式というテーマは非常によくて、担当部署でやる意義についても非常によく分かりました。そこに書かれている地域の人たちが、地元の若者の成人を地域として祝いたいということですね。そして、若者は、高校以降に離れ離れになった人たちともう一回わいわいしたいという同窓会的なところがあるというのもよく分かります。

若者の立場からすると、できる限り友達としゃべったりするような時間が長くあって、なおかつ、あまり関心のないような儀式的なものは要らないという意見が出るのかなと思います。一方で、若者に対してこういう場を強制的に与えることによって、若者だけではこんなに集まることができないところ、行政や地域がその場を与えているということで、地域のやり方について衝突するようなことが何かあるのかなと思ったのです。そして、それを若者の意見と地域で議論していく過程なのかなと想像したのですが、そういう衝突するようなものがあるかをお伺いしたいです。

その上で、仮にあった場合です。今回、ツールでアンケートを取ることができると思うのですが、議論の過程みたいなものが分かってくるわけですね。それぞれの思いがあって、衝突したり妥協したりがあると思いますけれども、そういう文脈みたいなものが分かって最終的に結論に至るということ若い人たちが見るということ自体に物すごく大きな意味があると思います。

先ほど、SNSなど、いろいろなツールがあってという話がありましたけれども、今のSNSの文化というのは、本当に結果だけ見る、コンテンツだけ見るような感じです。そして、それが正しいかどうかを判断するためには、仮に正しいものだと見せられても、文脈が分からず、コンテンツだけ見せられているので、物すごく薄っぺらい議論ばかりする若者がたくさんいるというのが私の印象です。コンテンツよりもコンテキストのほうが圧倒的に重要であるにもかかわらず、そういったことが全く我々大人から提供できていないのですが、文脈さえ分かれば、そういうものが何か提供できるのではないかなと思います。

ところが、ツールで文脈というのはどう認識したらいいかです。議論したものがツールに載っているのか、経緯が載るのかどうかです。

衝突するようなものがあるのか、そして、文脈がツールで後から追えるかどうかの2点を教えてもらえればと思います。

○事務局(川村市民自治推進課長) まず、1点目の衝突する部分があるかについてです。

この資料の地域の欄の現状のイメージや課題のところに書いてありますとおり、各区の実施委員会は地域の町内会ともリンクしているといいますか、そういう構成メンバーが多いので、実際問題として担い手不足がもう既に起きていまして、今までと同じような形で実施していくのが難しいという思いを持っておられる方も現状います。つまり、地域でやらないで市でやってくれよ、各区でやっているけれども、市がまとめてどこかに一会場をつくってやってほしいという思いがあるということです。

成人式の話をしてみますと、札幌市みたいに各地域が主体となって各区でやっているところは他の政令市を見ても少なく、どちらかというと、全市一括でやっているケースが多いのですが、逆にそういうところは出席率が低いということに悩んでいます。

それはなぜかということ、出席する側は、中学校時代の友達などに会うのが目的だからで、細かい単位で実施したほうが出席率は上がるという傾向があるからで、そういった点がぶつかる可能性があるところかなと考えています。

2点目の文脈のことについてです。

せっかくなので、この議論の過程は議論に参加しなかった人たちにも何らかの形でフィードバックしたいなと思っているところです。

○鈴木座長 アンケート調査というのはこれまでやられてきた手法です。また、議論するとき、やり方の多様性もあるかとは思いますが、ワークショップなどもあるかと思えます。ただ、今回の実験では、手順と書いてありますけれども、順番や組合せなどをどう位置づけて考えていくのか、そこで違いも見ながら、効果的な手法の参考にしていくという意味もあるのかなと思っています。

次回、具体的な話になるかと思えますけれども、そうしたご意見も伺いながら進めていければいいかなと思っています。

○事務局（川村市民自治推進課長） 今日アイデアがあれば出していただきたいのですが、今の話の流れで、事務局から手順案の2についてご説明しますと、実際に議論する段階で若者と実施委員会がぶつかるポイントがある可能性があるのも、中立的なファシリテーターを入れて議論するといいいのではないかなと思っています。

○鈴木座長 まだ考えがまとまっていないかもしれませんが、ファシリテーターといえますと三上委員なので、現時点でご意見があればよろしくお願います。

○三上委員 ファシリテーションで（中立的に）いろいろ議論を振ることもできますと思えますけれども、状況によっては結構難しい面もあるかと思えます。

今の話と若干ずれるのですが、1つはやり方の話です。

アンケートの対象が無作為に選んだ19歳と、大学生ということですよね。そして、実施委員会だけで本当に足りるのでしょうか。新成人というのは19歳の方で、それ（成人式）を体験していない人で、大学生には体験していない人と体験した人がいて、実施委員会は地域の方で、行政が入っていないですよね。行政からも無記名のアンケートを取ってもいいのかなと思います。

また、親にも何か思いがあるのかなと思っています。なぜならば、手法ではなく、根本の話ですが、国民の休日としての成人の日があって、その後、成人の集いというふうになったと思うのですけれども、その目的自体を調べてみると、大人になったことを自覚し、自ら生き抜こうとする青年を祝い励ますと書いてあるのです。そもそも、この目的が達成されているのかが最初の意義なのですが、それに参加する側とつくる側が基本スタンスとしてどういう気持ちでやっているのか、そもそもの目的に対してどう頑張っているかだと

思うのです。新成人の方は、そう固いことを言わずに会えてよかったねという感じでしょうし、でも、そのときの眠たくなるような話の中にしっかりとしたお説教が入っていて、帰って親に話をしたら私もそうだったよと言って共感して、でも、20歳になったのだからね…という話が家庭に帰って盛り上がることもあると思っていて、意義は必ずあると私は思っているのですけれども、その認識が芽生えたのかどうか、参加して何かにつながったのかが大切なのです。全ての行事には必ず目的があって、手法があるわけですが、それに参加して体験したことが次に活かされているかどうかが一番のポイントだと思うのです。

例えば、家に帰って、お父さんやお母さんの成人の日の話を聞いて大笑いしたなどです。私は山崎委員派で、成人式に行きませんでした。親には行きなさいと言われてましたけれども、何で行きなさいと言われてたかはよく分かっていません。それは反抗期だったのかも知れません。かといって、友達に会いたくなかったかという、そうではなくて、アンチということで、友達と会って酒を飲みました。

ですから、それが何につながったのか、本当はアンケートを取ってみたいのです。自分の人生が本当に変わったのか、変わらない人のほうが多いのかもしれないけれども、そういうことも含め、そのアンケートにどんな意義を持たせるかです。また、仮説を立てておくのがアンケートで、何をどう調査し、こんな結論になるだろうなということもありながらの分析項目を設置しないと、あれが足りなかった、これが足りなかったになってしまうのかなと思います。

また、今回の実験には2つの目的があると思っています。

成人の日の実際の政策見直しをやるということのほか、もう1つは、ツールが適正なのか、評価なのか、確認なのか、そこは我々が何かの基準で評価できるようなアンケートにしておかないといけないと思うのです。そうではないと、アンケートに回答しやすかったですかなどのリサーチも入れなければいけなくなります。もしくは、タイムキープで何秒かかったかが分かればいいのですし、友達同士でやったのか、何かの景品がもらえたらやったのに…なのかは分かりませんが、今回の中には幾つかの目的があって、確認しなければいけないことが結構あって、それを事前に確認しながらやらないと、やったはいいけれども、我々の市民自治の実験に実際になったのかどうかの評価は分かれるかもしれないなと思いました。

○鈴木座長 概括的に整理していただきまして、ありがとうございます。

実験と称しているわけですがけれども、何を見いだすか、何を検証するのが重要となってくるので、そこも含めて議論していただきたいと思います。

成人式は若者層のためのものということもありまして、大村委員にぜひご意見をお聞きしたいなと思います。

○大村委員 私は、成人式には参加したのですが、コロナ禍で、交流は少なかったです。

まず、この資料をいただいて、札幌市の成人式が地域の方々の実施委員会で開催されて

いたということを知りました。区ごとにやっているのですが、何となく行政がやっているのかなというイメージだったのですけれども、地域の人が開催してくれていると知ると、そこに感謝というか、ありがたい気持ちがあります。

新成人の人たちはそれを知るだけでも、歩み寄ったり、議論するときにお互いの考えを話しやすかったり、着地点を見つけやすいのかなと思うので、1枚目の資料に戻ってしまうのですけれども、情報共有や現状の情報を届けることはすごく大事なのだなと思いました。

また、このアンケート調査は、アナログとするか、デジタルとするかはまだ決まっていなようですが、実験ということですし、せっかくの機会なので、SNSなどのデジタルツールでも試し、それに対する感想もいただけたらいいのではないかなと思いました。

○鈴木座長 そのほかに何かご意見がある方はいらっしゃいませんか。

○事務局（川村市民自治推進課長） 今の話ですが、デジタルツールは恐らく間に合わないかなと思っていて、想定としては、無作為抽出した人に対しては郵送のアンケートとして、大学生に関しては、勝手ですけれども、大学の先生たちを通してということ想像していました。

斎藤広報部長、市のLINEアンケートを使ってやれそうですか。

○オブザーバー（斎藤広報部長） いつやろうとしていますか。

○事務局（川村市民自治推進課長） 早急にしようと思っています。

○オブザーバー（斎藤広報部長） システムの変更は恐らく間に合わないと思うのですが、例えば、LINEは本当に流れてしまうので、ターゲットを絞るのであれば、今はまだLINEではないほうがいいのかと思っていました。

また、デジタルをかませるとき、アンケートサイトをもし使えるのであれば、普通のウェブのアンケートサイトを使って、郵送と併用し、送った紙にQRコードをつけて、そのQRコードでも答えられますよとすれば少しはいいのかもしれない。

○事務局（川村市民自治推進課長） そういったアイデアも取り入れたいと思います。

なお、これは僕の個人的な今の思いですけれども、アンケートについても聞き方を何パターンかにするのもありかなと思っていました。

答えやすさの話が以前あったと思うのです。たくさん項目があると、見た時点で嫌になるということもあると思うので、すごく簡単なことを2、3問で問うパターン、あるいは、同じことを聞くのでも表現を変える、行政独特のお堅いアンケートではないような、そういう問いかけの仕方のもとしてもいいのかなと思っていました。

○三上委員 あまりパターンを変えると、答えやすさも含め、いろいろなものによってバイアスがかかってしまうのかもしれない。でも、同じことを平易な表現とちょっと硬い表現で聞くだけでも違うと思います。受け止め方が違うので、同じ人にどちらがいいかを聞くのはいいかもしれないですけれども、それによって結果の出方が違ってくるのかなと思います。

毎年、鈴木先生のゼミの学生に、商業施設に関するお客様アンケートを実施してもらっていますが、学生から1回目のアンケート案が来ると、ちょっと表現が違っていたり、本当に答えやすいのか？とか、バイアスがかかっていたり、ある一方の側に丸をつけやすくなる表現もあるので、つまり聞き方によっては裏と表のどちらにも出てしまうのです。それを意図せず、どちらに誘導することもなくフラットなものでやると、意味の同じ問いかけで、あとはどういう回答が返ってきたかを見られると思いますし、それでアンケートに答えやすかったかどうかをはかるのがいいのかもしれないなと思いました。

アンケートは、設計の段階でいろいろなパターンをつくると、我々が分析できなくなるような気がしました。

○鈴木座長 思うに何を把握したいかですね。

○オブザーバー（斎藤広報部長） 今のお話の延長からいくと、項目をどう工夫するかもそうですけれども、先ほどから言っているとおり、属性をどう捉えるかがすごく重要です。

19歳チームと大学生チームで何となくの結果が見えてくるかもしれないですが、先ほどの山崎委員の話の踏まえると、同じ19歳でも、札幌出身なのか、あるいは、札幌の中でも転居し、昔と違う区に住んでいるのかによっても傾向は変わってくると思うのです。それを細かく捉えようとすればするほどややこしくなってくるので、その属性をどこまで把握するのかについてはある程度設計したほうがいいのかなという気がしています。

○鈴木座長 ほかにございませぬか。

○野田委員 属性は、基本、札幌市民かなという気がします。他の市民ではなく、札幌市民であるということです。そして、大学生や19歳など、今そこに挙げられている人たちが十分かなという気がしています。

というのも、あまり広げてしまうと、当事者意識といいますか、先ほどのサイレントマジョリティの話もありますけれども、そことのトレードオフみたいなものが生じてしまうのかなと思いました。

もう1つ、郵送ということでしたが、やはりウェブがいいと思います。私のゼミにも7つぐらいのチームがあって、1年に7本ぐらい、市民にアンケートを取るのですが、そのときにはグーグルフォームやマイクロソフトのフォームズで実施しています。それはすぐにできまして、学生もすぐ回答してくれます。でも、郵送にした場合、書かないと駄目なので、なかなか回答してくれないので、できる限りオンラインのほうがいいかなと思います。

市民の特定をどうするのか、妙案はないのですが、できる限りオンラインがいいのかなと思いました。

○鈴木座長 私のところの学生にもそういった傾向があります。

ただ、今回は、郵送という従来の方法でもやってみて、回収率や意見の内容も比較してみたいなという思いもあります。何を調べたいかにもよりますが、今後、設計については考えたいなと思います。

特定の名称を出してしまいますが、最近、グーグルフォームで学生が簡単につくれてしまいます。何問ぐらいあるか、5分以内というのが結構重要なのですけれども、そうして答えてもらいやすくするなど、そうした具体的な話は今後話していければいいかなと思っています。

そのほかに何かございませんか。

○梶井委員 皆さんもおっしゃっていましたが、アンケートで何を問うのかがまだ曖昧だと思います。何を問うかを決め、それをどうやって問うのか、そして、誰に問うのかという対象が決まってくるのですけれども、何を問うのかがまだ見えてこないのも、何も言えないのですけれども、そこがはっきりした上で対象をどうするかですね。

そして、属性の話も出ましたけれども、アンケートの対象者が大人は実施委員会しかないのです。これは偏っているかなと思います。三上委員がおっしゃったように、例えば親もいるでしょうし、地域に住む大人たちが成人式をどう感じているのか、どうあったらいいと思っているのかなども欲しいのです。

しかし、今、野田委員がおっしゃったように、対象を19歳や大学生に絞るというやり方ももちろんあります。若い人たちや当事者の意見を聞くとして、絞るのもいいと思うのです。でも、ここに実施委員会が入っていて、大人の側が一方的に偏っているなという感じがして、なかなか悩ましいなという印象を受けました。

どちらにしても、何を問うかによって対象者が動いてくるのかなという感想です。

○鈴木座長 まさしくおっしゃるとおりですね。

結構いい時間になってまいりましたけれども、事務局からこれを確認しておきたい、あるいは、これについてご意見をいただきたいというものがありませんでしたらお願いします。

○事務局（川村市民自治推進課長） 今回の何を問うのかについてです。

我々が問いたいことは、はっきりとは書いていないのですけれども、先ほどの（2）の行政目線での成人式のイメージと課題に通じることで、地域からはこれまでのように実施していくのが難しいという意見もある、行政としては、これ以上、お金をかけられないという事情がある、でも、何とかしなければならなくて、今後どうやって成人式をみんなが納得する形でやっていけるかです。

そこで、当事者である若者と実施委員会を対象としたのです。

○梶井委員 考え方によっては、アンケートは19歳に絞って、それを土台とした議論の場を実施委員会や行政に来てもらうというやり方もあるのかなと思います。

○三上委員 最初に、今、成人の日の行事の存続がかかっています、危機ですと言って始めて、親世代にアンケートを取ったら、親世代が地域の担い手に手を挙げやすくなるということもありますよね。これはバイアスがかかるものですが、このように存続させたいのであれば存続させたいような問い方も実はあるのです。

ですから、実施したいかしたくないかを新成人に問うても、タダだったら、友達にも会えますし、出たいわけです。そして、担い手に言うと、ちょっと勘弁してよと言われると

ということですし、札幌市としてはお金が結構かかるからなとなるわけですね。そこで、ここに関わっていない人たちがもっと関わったり、思いを持って、地域が成人を祝うという最初の目的を達成するためにどうするのかということであれば、親が1番思いを持っていたりするでしょうし、おじいちゃんやおばあちゃんがもしかすると重い腰を上げるかもしれないですね。あるいはお金だけでも、となるかもしれませんが、地域の会社がぜひうちに就職してくださいという意味でお金を出したりするかもしれないのです。

おっしゃったとおり、最初に思いのあるほうにどういう気持ちなのかを聞いた上で、地域がどう支えるかという2段階でやると面白い方向に行くかもしれないですね。

○鈴木座長 1番のアンケートと2番の議論のところで対象者も違うわけですから、始まる前に参加者にアンケートを取って、議論後にまたアンケートを取るというのも1つの手かなと思っていました。

また、全然土俵が違いますので、かなり外れた議論になるかもしれませんが、以前、うちのゼミ生が卒論で結婚式に関する意識調査をやったのです。本市もそうですけれども、親にはきちんとしたホテルで式をやったというイメージでいる方が多いらしいですね。でも、この間、卒業生の結婚式に行きましたけれども、ホテルでのきちんとした結婚式をやらず、レストラン婚という感じで、みんなで楽しくみたいなのがよいということで、ひな壇もありませんでした。各席に椅子が置いてあって、みんなで回ってがやがやとやっていました。

会費制と招待制の違いもあるのですけれども、若者と地域の方、また、実施委員会の方の意識の差、その合意形成まではいかないのですけれども、そこも調べられると面白いかなと個人的には思っていたところです。

○三上委員 これをやると、例えば地域のお祭りやいろいろな行事のように、みんなで支え合って何かをやるということの意識と似たような傾向がもしかしたら出るかもしれないですね。

今、担い手不足で地域が困っていますよね。今回は成人の日というターゲットを絞り込んだものですが、地域の方が支える、行政も支えるということであれば、今廃れていっている地域の行事をどう考えていくかの参考にもなるような気がします。

○鈴木座長 全体を通して確認しておきたいことや重要なキーワードなどがありましたらよろしく願いいたします。

事務局の方に今日の議論をまとめていただくことになるかと思えますけれども、何か確認しておきたいことがありましたらお願いいたします。

○事務局（神市民自治推進室長） 当然、アンケートをどうやっていくのかは大切ですが、もう一つ大切なのは議論です。

それぞれ対象者がいる中でどうやって議論をしていったらいいのか、皆さんで結論を導き出せるような仕組みにするのかなど、いろいろなやり方がきっとあると思うので、議論のところをもうちょっと深掘りしていただければ、私たちの次の会議への準備がもっと具

体的にできるかなと思っています。

例えば、山崎委員が前にミニ・パブリックスの話をされたことがあります。そういったものが使えるのか、あるいは、別な方法があるのかなど、そんな話をお伺いしたいなと思っています。

○鈴木座長 今、ミニ・パブリックスの話が出されましたが、山崎委員、いかがですか。

○山崎委員 先ほど言ったように、アナログと同時にデジタルでやるときで、アナログでやるときに無作為抽出で市民を集めるというときには非常に有効なやり方ですし、そこでどのようにどういった人たちを集めていくのかのノウハウがある程度蓄積されていますので、ミニ・パブリックスというのは、ある種、意見集約の有効な到達点でありますので、最新の手法はどうかを調査しながらやっていくことは大事だと思いますし、期待しています。

○鈴木座長 議論のやり方をもう少し深掘りしてという話もございましたけれども、皆様方から何かご意見がありましたらお願いいたします。

○事務局（川村市民自治推進課長） ここにスケジュール感が書いてありますとおり、次回もどうやってやるかの議論をさせていただきたいと思っていますので、次回、たくさんいただければと思います。

○鈴木座長 今日の議論やアイデアも踏まえ、次回までにお考えいただければと思います。次回の第4回はいつぐらいの開催をイメージしておけばよろしいでしょうか。

○事務局（寺川町内会支援担当係長） 皆様のご都合にもよるとは思いますけれども、可能であれば3月末か4月に入ってすぐを予定しております。

○事務局（川村市民自治推進課長） 日程調整は改めてさせていただきます。

○鈴木座長 そのようなスケジュール感で、皆さんからまたご意見をいただきながら進めてまいりたいと思います。

それでは、今回、成人の日を題材に事務局より案を出していただきましたけれども、これで進めさせていただいて、次回、手順や議論の中身、あるいは、アンケートのことも含め、具体的な設計していきたいと思っていますので、次回もよろしくをお願いいたします。

最後に、皆さんより全体を通して何かございましたらよろしくをお願いいたします。

（「なし」と発言する者あり）

### 3. 閉 会

○鈴木座長 それでは、以上で本日の会議を終了します。

非常に活発なご議論をいただきまして、誠にありがとうございます。

次回もよろしくをお願いいたします。

本日は、どうもありがとうございました。

以 上